

渡 辺 義 介 賞



新日本製鉄(株)副社長
豊 田 茂 君

わが国鉄鋼業の進歩発展

君は昭和15年3月九州帝国大学工学部機械工学科卒業後直ちに日本製鉄(株)に入社、輪西製鉄所工務部勤務、富士製鉄(株)室蘭製鉄所保全課長、企画課長、圧延課長、製鋼副部長、本社生産管理部長、取締役、常務取締役を歴任、昭和45年新日本製鉄(株)となり、同社常務取締役、取締役副社長・君津製鉄所長を経て、昭和54年技術担当副社長に就任し、現在に至っている。この間、既存製鉄所における技術革新、新鋭製鉄所の建設企画、新鋭シームレスミルの建設企画ならびに石油危機に対応した省エネルギーの推進など、数多くの卓越した業績をあげた。

1. 昭和30年代、室蘭製鉄所合理化計画推進の責任技術者として、卓越した技術力と決断力をもって、新規考案を採用した工場を建設し、その操業を担当した。特にホットストリップミルの建設と操業、平炉建屋の50トン転炉へのリプレース、転炉によるステンレス吹製技術の基礎の確立、我国初の国産連铸機の導入、溶鋼の真空処理技術の開発育成等今日の鉄鋼業発展の基盤を築き、鉄鋼技術の進歩に貢献した。これらの業績により渡辺義介記念賞、服部賞、藍綬褒章を受けた。

2. 昭和44年、大分製鉄所の建設に着手するや、技術の責任者として活躍、鉄鋼技術の未来をかけて、世界

最初の全連铸製鉄所の実現を決断し、建設推進の陣頭指揮にあたった。また、大型・超高圧高炉とステープ冷却方式の早期導入をはかるなど常にパイオニア精神に徹し、新技術開発に指導的役割を果たした。

3. 昭和40年代後半、油井管、ラインパイプの需要増大、品質の高級化・厚肉化傾向に対応すべく、シームレス・パイプ・ミルの建設指導にあたった。このミルは、角断面素材から直接造管するプレスロール穿孔プロセスの他、新開発技術を多数取入れた、世界最新鋭ミルであり、品質向上、省資源、省エネルギー等に顕著な効果をあげている。

4. 昭和52年君津製鉄所長に就任し、高炉燃料比の大幅切下げ、LDG回収原単位向上、加熱炉燃料原単位や成品歩留りの向上、CC適用鋼種拡大など数々の成果をあげ低操業時代における製鉄所運営の規範を先がけて確立した。

5. 業界の不変の課題である省エネルギーについても、全社にわたる広範囲な施策を積極的に推進しエネルギー削減10%を達成した。さらに、連铸比率の向上、直送圧延比率の向上、各種排熱の回収、オイルレス高炉操業技術の確立など、我国鉄鋼業発展の基盤となる各種技術開発に多くの実績をあげた。